

「目が見えず、耳が聞こえない」(マコ 8:14~21)

弟子たちはイエスと共にガリラヤ湖を渡っていました。舟にはパンが一つしかなく、弟子たちは慌てました。するとイエスは弟子たちに、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と言いました。イエスは、パンを忘れて来たことで心が一杯になり、落ち込み、ひよっとしたら喧嘩をしていた弟子たちに、「くよくよするな、そんなことは大した問題ではない。もっと大事な、深刻な問題があるのだ」と言ったのです。しかし、弟子たちは自分たちのことを怒っているのだ、と受け止めました(16節)。イエスはそのような弟子たちに対して厳しい言葉をかけます(17~18節)。「いつまでパンを忘れたことにこだわっているのか。私がそんなことを問題にしていないことが分からないのか。彼らの心が頑なになっている、当然見えるはずのことが、聞こえるはずのことが、見えなくなり、聞こえなくなっている。」と言うのです。それでは、本当に見つめるべきこととは何でしょうか。イエスは「覚えていないのか」と言っています(18節)。イエスは弟子たちに、五千人の給食と四千人の給食の出来事を思い出させています(19~20節)。弟子たちはイエスにおいて実現している神さまの大きな恵みとその目で見、体験してきたはずなのに、彼らは今、自分たちのささやかな失敗のことで頭が一杯になり、イエスがそれを怒っているに違いないと思ひ込み、そのためにお互いを責め合っていたのかもしれない。本当に目が見えるというのは、この神さまの恵みを見つめることであり、本当に耳が聞こえるとは、この恵みを告げるみ言葉を聞いていることなのです。

パン種とはいわゆるイースト菌のことです。それ自体はごく小さいが全体に影響を及ぼす、特に悪い影響を及ぼすもののことを言うときによくこのたとえが用いられます。11~13節に出てくるファリサイ派の人々の姿によって示されているように、彼らは、イエスが神からの者であるかどうかを自分たちで判定しようとしているのです。そのような思いを生むのがファリサイ派のパン種です。また、ヘロデのパン種とは、政治的な権力を握ろうとして、そのためにより上位の権力に媚びへつらい、その言いなりになっていくような生き方のことだと言えます。この二つのパン種はどちらも、神さまの恵みや慈しみを見つめておらず、そこに信頼を置いていないということです。つまりこの二つのパン種に共通しているのは、神さまの大いなる恵みのみ心という、本当に見つめるべきことを見つめておらず、そのことを告げるみ言葉を聞いていないということなのです。

み言葉によって与えられるイエスとの出会いと交わりによって、私たちは主の恵みを覚えて生きることができるのです。